

## 海や大地を渡る人たち



ロシア・ハバロフスク市在住

岡田 和也

「遠く遠く地球を北へ 寒くて冷たい水の国へ」。暮れに枕元のラジオから流れてきたNHK「みんなのうた」の『ホッキョクグマ』。何かがおかしい地球の様子に戸惑う動物たちの悲鳴を伝えるこの歌を歌っているロシアの歌姫エカテリーナさんは、1995年初来日して『さっぽろ雪まつり』出演を皮切りに日本各地で演奏活動を続けており、レパートリーには『異邦人』『秋桜』『小さい秋みつけた』『千の風になって』などの日本の歌も含まれています。出身は東シベリヤのチター州（現在はザバイカーリスキイ地方）とのこと。

そのチターとここハバロフスクを結ぶ道は未だに相当な難路だそうで、昨年、ロシア極東のヴラヂヴォストークからユーラシア大陸を横断してポルトガルのリスボンまで自転車旅をされたアメリカ・ロスアンジェルス在住の栗原直人さんも、その区間だけはシベリヤ鉄道を利用されました。当地の印象を伺った際の「町の景色というのには興味がないと言ったら失

礼なんですけれどもどこも似ているところがあるものですから、わたくしにとってはそこでお世話になった方々の親切な好意の町という感じがあります」とのお言葉にいたく感動し、旅先からの「いただいた味噌汁は飲んでしまうとあなたとお別れしてしまうような気がするので終わりまでとっておきます」との英文のメールにも温かな奥床しいものを感じました。ふと、ロシアの文豪ニコライ・レスコーフの短篇小説『真珠の首飾り』のなかの「今、人はたくさん乗物で旅をしますが、素早く当り障りなくでして、それでその人にはなんの強い印象ももたらされず、彼には観察する事柄も時間もなく、すべてが滑るように過ぎていきます。まさにそれで貧困なのです」という一節が思い出されます。

昨秋、ロスアンジェルスに大学に留学している日本人のかたから廃食用油を燃料に精製する「バイオディーゼル燃料プラント」を搭載した車で世界一周の旅をしている友人の北海道帯広市出身の報道

写真家でラードライヴァーの山田周生さんが近く当地を通過することを知り、お話を伺いました。ロシア人のサポーターが私をホットガレージまで車で運んでくれた際にお礼にお金を払おうとすると「おまえはクレージーだ」と言われてなんだか嬉しくなりました。現場ではすでにどろどろの廃食用油の精製がさかんに行われていて、その傍らで仲間のロシア人たちが和やかに昼食の支度をしていました。インタビューが済んで数日前に妻が鶏の唐揚げをした油を渡した瞬間の山田さんと同乗者の明石さんの顔の輝きは私の心に忘れがたい印象を残しました。ほんのひと掬いの廃油をこんなにも喜んでくださるとは思いもよらなかったのです。「千里の道も一歩より」という老子の言葉が俄かに身近に感じられます。なお、山田さんは今度は日本を一周されるそうですので、皆様がお住まいの町にも廃食用油を通した温かな触れ合いの機会が訪れるかもしれません。



左から、栗原直人さん、ホームステイ先のマリーナさんとマリーヤさん、友人のアメリカ河畔の放送センターの前で



「バイオディーゼルアドベンチャー」プロジェクトの山田周生さん（右）自宅の廃食用油を手にされて」と明石さん（左）。（2008年11月4日、ハバロフスク市ラヂーシチエフ通りのホットガレージにて）